

(三) 主体(人間など)が、対象を両足の間にはさ  
んで立つ。

(四) 主体(橋など)が、対象を上からはさむよう  
にして、たっている。

「またがる」

(一) 主体(人間など)が、対象の上を、両足をひ  
ろげた形でのる。

(二) 主体(橋など)が、対象の上を接触しないで、  
両足をひろげたようにたっている。

(三) (地理的、時間的なことを表す)主体が、境  
を表している対象を越えている。

(四) 主体が、複数ある対象と、それぞれある関係  
を持っている。

以上から、まず主体が生物(人間)の場合の用法を  
見ていただきたい。「またぐ」の(一)(三)と「またがる」の  
(一)である。「またぐ」は、対象の上の移動か、対象を  
はさんで立つことを表し、「またがる」は、対象の上  
にのることを表す。すなわち、この両語の動作の目的は、  
移動すること、たつこと、のることという異なったも  
のであり、各々異なった動作を指していると言えよう。  
従って、この用法では、両語に類義関係があるとは、  
認められない。

しかし、橋などが主体となる場合はどうであろうか。  
「またぐ」の(四)と「またがる」の(二)を見ていただきたい。  
どちらも、ほぼ同様のことを指している。ただ、「また  
ぐ」の場合、(四)であげたように、橋など無生物のとき  
は、「～ている」の形にしなければ使いにくいよう

ある。次の例を見ていただきたい。

(37) 吾妻橋は 隅田川を またぐ。

(38) 吾妻橋は 隅田川を またいでいる。

(39) 吾妻橋は 隅田川に またがる。

(40) 吾妻橋は 隅田川に またがっている。

(37)と(38)は判断の分かれるところであろうが、(37)は不  
自然であると思われる。また、(39)(40)の意味的違いは、  
ないと言ってよいのではないだろうか。語形が違っ  
ても意味的な違いが見出し得ないことから、この場  
合における「またがる」は、瞬間動詞か継続動詞かの  
分類には大変迷うところである。

越えるという場合の用法においてはどうかであろうか。  
「またぐ」の(二)、「またがる」の(三)を見ていただきたい。  
「またぐ」の方は、主体の動作を指しているが、「また  
がる」の方は主体の状態を指している点が異なる。

以上のほかに、「またがる」の(四)は、「またぐ」に比  
較できる用法がなく、「またがる」だけが持つ意味で  
あろう。

本稿を書くにあたり、中本ゼミの皆様、及び中本正  
智先生には大変お世話になった。また、東京外大の井  
上史雄先生には、貴重な助言もいただいた。記して感  
謝致します。

言語経歴：1955年11月 神奈川県鎌倉市生

0歳～2歳 鎌倉市 2歳～15歳

埼玉県川口市 15歳～19歳 埼玉県

上尾市 19歳～25歳 東京都調布市

25歳～ 埼玉県桶川市

## わたる・こえる

藤田勝良

### 1. はじめに

「わたる」「こえる」は、ともに広い意味領域を有し  
ているが、<sup>(注1)</sup>具体的な移動を意味する動詞として用いら  
れるときには、次のように類似した意味を表わす文を  
作る。

(1) 川を わたる。

(2) 川を こえる。

ここでは、このように具体的な移動を意味する動詞  
として用いられた場合の両語の意味のちがいを考察し  
たい。

### 2. 構文

具体的な移動をあらわす動詞と共起する名詞句には、  
移動主体を表示するもの、出発点を表示するもの、経  
由点を表示するもの、到着点を表示するものの4種が  
考えられる。この4種の名詞句と「わたる」「こえる」  
との共起関係を比較してみよう。

(3) 人が 海を わたる。

(4) 人が 海を こえる。

半沢1977に指摘されているように、移動主体を表示  
する名詞句、經由点を表示する名詞句は両語と共起可

能である。ところが、出発点を表示する名詞句、到着点を表示する名詞句は、「わたる」とは共起するが、「こえる」とは共起しにくい。<sup>(註2)</sup>

- (5) 日本から 海を わたる。
- (6) ??日本から 海を こえる。
- (7) 向う岸へ 川を わたる。
- (8) \*向う岸へ 川を こえる。

(8)で「向う岸へ」と「川を」の順序を入れかえてみると文の許容度は増すが、やはり不自然である。

- (9) ?川を 向う岸へ こえる。

以上から「わたる」は〈移動主体の出発点から経由点を経て到着点までの移動〉を意味すると考えられるが、「こえる」は出発点や到着点は含意せず、もっぱら〈移動主体の経由点を経ての移動〉を意味するものと考えられる。

次のように、ある領域を区分する境界線あるいは何らかの基準となる線や点が経由点となる場合には「こえる」が用いられ、「わたる」は用いられない。これは、経由点に幅が考えられず、経由点の両端に出発点と到着点を想定することができないためであろう。

- (10) \*国境を わたる。
- (11) 国境を こえる。
- (12) \*赤道を わたる。
- (13) 赤道を こえる。
- (14) \*列車が ポイントを わたる。
- (15) 列車が ポイントを こえる。
- (16) \*車が 道路の白線を わたる。
- (17) 車が 道路の白線を こえる。

一方、経由点に幅の想定されるものがある場合には、次のように両語が共通に用いられることが多い。

- (18) インド洋を わたる。
- (19) インド洋を こえる。

では、この場合に両語の意味特徴にちがいはみられないであろうか。以下では、次の構文を軸に両語の分析を行っていきたい。

- (20)  $N_1$ が  $N_2$ ヲ —— ( $N_1$ は移動主体,  $N_2$ は幅の想定される経由点)

### 3. 移動主体

移動主体としては、「わたる」が「人」「船」など自力で動くものに限られるのに対し、「こえる」は自力で動くもの他に、外から何らかの力を加えられて動くものも可能である。その場合、力を加えるものは、有生物であることも無生物であることもある。

- (21) 人が 川を わたる。

- (22) 人が 川を こえる。
- (23) 船が 太平洋を わたる。
- (24) 船が 太平洋を こえる。
- (25) 隊商が 砂漠を わたる。
- (26) 隊商が 砂漠を こえる。
- (27) \*彼が投げた石は 川を わたって 向う岸まで いった。
- (28) 彼が投げた石は 川を こえて 向う岸まで いった。
- (29) \*風に舞い上がったビラは 通りを わたって 路地裏まで 飛んでいった。
- (30) 風に舞い上がったビラは 通りを こえて 路地裏まで 飛んでいった。

なお、「わたる」に関して次のような例があるが、これは比喩的に用いられているのであり、具体的移動をあらわすとはいえない。<sup>(註3)</sup>

- (31) チャンピオンベルトが 太平洋を わたる。

### 4. 経由点

幅の想定される経由点は、「川」や「砂漠」など「わたる」「こえる」ともに移動のうえで障害となるものが多い。

- (32) 大井川を わたる。
- (33) 大井川を こえる。
- (34) 海峡を わたる。
- (35) 海峡を こえる。
- (36) オホーツク海を わたる。
- (37) オホーツク海を こえる。
- (38) 砂漠を わたる。
- (39) 砂漠を こえる。
- (40) 湖を わたる。
- (41) 湖を こえる。

上に示した例文の経由点は、いずれも移動に際して障害になると思われるものである。では、経由点が特に障害としてとらえられないもの場合はどうであろうか。

- (42) \*人が 砂浜を わたる。
- (43) ??人が 砂浜を こえる。
- (44) \*人が 公園を わたる。
- (45) ??人が 公園を こえる。
- (46) \*人が 校庭を わたる。
- (47) ??人が 校庭を こえる。

この場合には、「わたる」は用いることができず、「こえる」も多くの場合不自然である。ところが、「こえる」は、次のように外から力を加えられたものや無

生物が移動主体となる場合には、経由点が特に障害としてとらえられない場合も可能である。

- (48) 投げた石が 砂浜を こえる。
- (49) 空中に舞上がったピラが 校庭をこえる。
- (50) 波が 砂浜を こえる。

しかし、この場合に〈表現者の領域から徐々に遠ざかる〉意味を動詞に付加する「ていく」をつけて次のようにいうことは不自然であるから、この場合の経由点は、幅のあるものとしてではなく、通過の1つの基準となる線や点とみなされていると考えた方が妥当であろう。(33)(35)(37)(39)(41)の場合は、いずれも「こえる」に「ていく」をつけて自然な文をつくることができる。)

- (51) ??投げた石が 砂浜を こえていく。
- (52) ??空中に舞上がったピラが 校庭をこえていく。
- (53) ??波が 砂浜を こえていく。

以上から、「わたる」「こえる」ともに幅を想定される経由点は、障害としてとらえられるものであるということができよう。

では、障害としてとらえられるものであれば、すべて両語共通に経由点としてとることができるであろうか。

- (54) \*山を わたる。
- (55) 山を こえる。
- (56) \*丘を わたる。
- (57) 丘を こえる。
- (58) \*峠を わたる。
- (59) 峠を こえる。
- (60) \*土堤を わたる。
- (61) 土堤を こえる。

半沢1977, 森田1977, 山田1979に共通して指摘されているように、「わたる」は、経由点が凸状にもりあがっている場合には用いることができない。一方、凹状にくぼんでいる場合には、次に示すように両語とも使用可能である。

- (62) 谷を わたる。
- (63) 谷を こえる。

このことと、先に示した(32)(34)(36)(38)(40)の例文で水平なものが経由点である場合に両語が使用可能であることをあわせて考えると、「わたる」は、山田1979の指摘するように経由点の両端が同一水平面上にあってそれが見通せることが必要であり、「わたる」にはそうした制約がないといえよう。次例の適否は、このことを支持するものと思われる。

- (64) \*やぶを わたる。

- (65) やぶを こえる。
- (66) \*日の差さない うっそうと生い茂った森を わたる。
- (67) 日の差さない うっそうと生い茂った森を こえる。
- (68) \*からまつの林を わたる。
- (69) からまつの林を こえる。

では、「こえる」は経由点としてとるものに制約はないのであろうか。

- (70) 堀を わたる。
- (71) ?堀を こえる。
- (72) 浅瀬を わたる。
- (73) ??浅瀬を こえる。
- (74) 沢を わたる。
- (75) ??沢を こえる。

上の例文の経由点はみな水平なものであるが、「こえる」は使いにくい。一方、(32)から(41)に示した水平な経由点は、「こえる」も使用可能であった。何故このような判定のちがいが生じるのであろうか。両グループの経由点を比較してみよう。すると、(32)から(41)の経由点は、「川」「海」「砂漠」「湖」など、そこの移動に比較的大きな抵抗を伴うと考えられるものであり、(70)から(75)の経由点は、形状・広がりからみてそこの移動にそれほど大きな抵抗を伴うとは考えられないものであることに気づく。

このことからすぐに「こえる」は〈移動に多大な抵抗を伴う経由点をとる〉とすることは、例文の判定が微妙なため問題があるが、少なくともそのようなものが経由点として想定される傾向のあることは記述しておく必要があると思われる。

ただし、この抵抗の大小ということは、もっぱら水平な経由点についてのみに注意されるようで、隆起した凸状の経由点については関係しないようである。例えば、次の例文を参照していただきたい。

- (76) なだらかな丘を こえる。
- (77) 低い土堤を こえる。

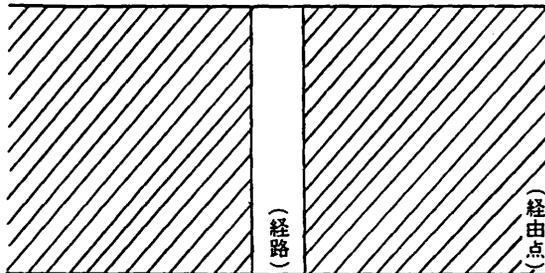
ところで、経由点の移動に多大な抵抗を伴う場合、その経由点を直接とおらなくてすむような移動媒体が経由点に設置されることがある。これを経路と呼ぶことにすると両語はこの経路の移動についても興味ある対照を示す。

- (78) 川にかかった鉄橋を わたる。
- (79) 川にかかった鉄橋を こえる。
- (80) 線路の踏み切りを わたる。
- (81) 線路の踏み切りを こえる。

- (82) 谷にかかったつり橋を わたる。
- (83) 谷にかかったつり橋を こえる。
- (84) ビルとビルの間にはられたロープを わたる。
- (85) ビルとビルの間にはられたロープを こえる。

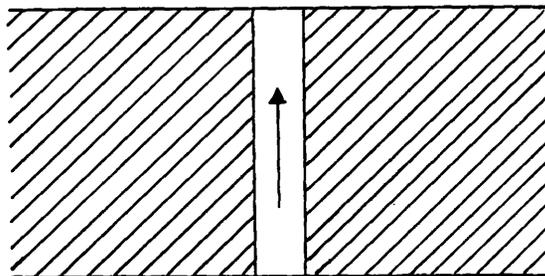
上に示した例文は、一応みな適格な文であるといえよう。しかし、ヲ格で示された経路に対する移動の方向は一樣ではない。

まず経路と経由点の関係を一般化して図に示してみよう。これは図1のようになる。



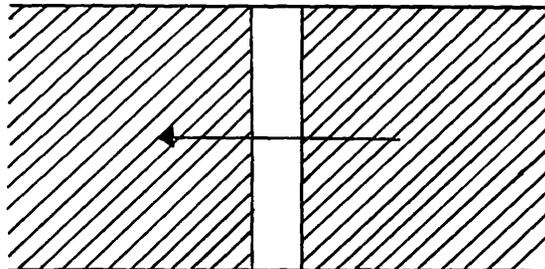
(図1)

上の例文のうち、「わたる」の用いられる例文は、常に経路に沿った形で経由点を横断する移動をあらわすと解釈される。即ち、図2に示す形での移動である。これは影山1981で、「『渡る』は、川であろうと橋であろうと、とにかく物体(障害物)を'cross'するような移動を意味する。(p. 51)」と指摘するとおりである。



(図2)

「こえる」はどうであろうか。(79)(81)(83)では、図2のように経路に沿って経由点を横断する場合と、図3のように経路そのものを横断する場合の2とおりの移動が考えられよう。



(図3)

また、(85)は図3のように経路そのものを横断する形での移動でなければ不適格な文となる。

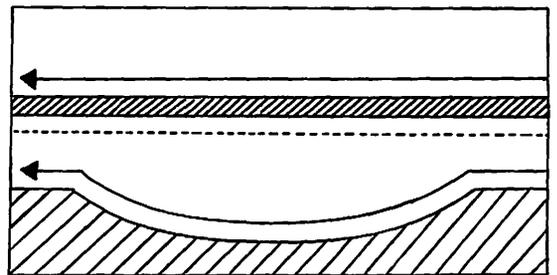
このように「こえる」は、ヲ格に経路になると考えられるものがきても、これに沿った経由点の横断を意味するとは限らず、経路そのものの横断を示すことが多い。これは2.でみたように、「こえる」が障害物を経由点とするだけでなく、特に障害とは考えられない線や点をも通過点としてとりうるためであると考えられる。即ち、障害物に対して設置された経路という側面を無視して、これを単なる基準線や点と考えれば、経路を横断するような移動も可能となるわけである。

ただし、(85)が何故一義的に経路そのものを横断する移動としか解釈されないのかという点は問題として残る。

## 5. 移動の形状

前節では両語の経由点の分析を行ったが、ここでは、この分析の一部をもとに両語が示す移動の形状を考えてみよう。

まず「わたる」は、「山」「丘」「峠」「土堤」のように凸状に隆起した経由点の移動はあらわすことができないのに対して、「大井川」「海峡」「オホーツク海」「砂漠」「湖」のような水平な経由点、および「谷」のように凹状に沈降した経由点の移動はあらわすことができる。このことから「わたる」は図4に示すように水平な移動といったん下ってまた上るような移動の2つを表わしうるものと思われる。



(図4)

ただし、このことは、先に述べた「わたる」の経由点についての特徴(両端が同一水平面上にあってそれが見通せる)ということから必然的に導かれることであり、特に新たに特徴として記述する必要はないであろう。

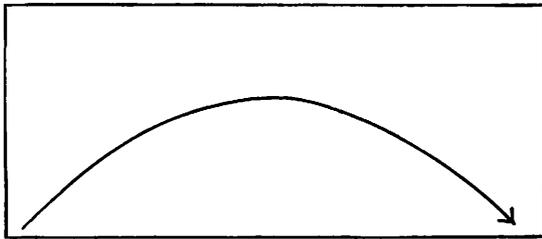
一方「こえる」は「山」や「丘」のように凸状に隆起した経由点の移動も、「谷」のように凹状に沈降した経由点の移動も、「海」や「川」のように水平な面として把握し得る経由点の移動もともにあらわすこと

ができる。このことから、「こえる」は移動の形状という特徴に関して、一見非関与的であるように思われる。

ところが、移動が経由点の面に接触するものであるか、接触しないものであるかという観点から、さらに分析を加えてみると面白い事実気づく。次の例文を参照されたい。

- (86) 山を 歩いて こえる。
- (87) 丘を 歩いて こえる。
- (88) 峠を 歩いて こえる。
- (89) ?谷を 歩いて こえる。
- (90) ??海を 泳いで こえる。
- (91) \*川を 船で こえる。
- (92) ??湖を ボートで こえる。

「山」「丘」「峠」は、隆起した形状であり、それへの接触移動はおのずと、図5に示すような上方に弧を描く形の移動となる。「こえる」は、これらが経由点である場合には接触移動であることを明示する語句と共起できる。



(図5)

半沢1977では、次の(93)(94)(95)の例をあげて、凸形でも線の凸形が経由点にくる場合の「こえる」は接触無視という特徴をもつとしているが、これは移動が瞬間的に行われることを示すとどまると考えられる。(96)(97)が可能であるからである。

- (93) \*少年が 垣根を 越えている。
- (94) \*少年が 垣根を 越え始めている。
- (95) \*少年が 垣根を 越え終わる。

(96) 少年が しがみつくようにして 垣根を こえる。

(97) 塀を よじのぼって こえる。

さて一方、(90)(91)(92)に示すように「海」「川」「湖」などその形状が水平で、それへの接触移動がおのずと水平な移動となるもの、また「谷」のように凹状で、それへの接触行動が下方に弧を描く形の移動となるものが経由点である場合には、「こえる」は接触移動であることを明示する語句と共起しにくい。

これらのことから、「こえる」は<経由点の上方に弧を描く形での移動>を示すと考えられ、水平あるいは凹状の経由点について用いられる際にも図5のような移動の形状が想起されているものと思われる。

次に示す例文の適否は、「わたる」「こえる」の移動の形状についての特徴をよくあらわしている。

- (98) \*アマゾン川を 飛行機で わたる。
- (99) アマゾン川を 飛行機で こえる。
- (100) アマゾン川を 船で わたる。
- (101) ??アマゾン川を 船で こえる。

即ち、同じアマゾン川を横断するにしても、飛行機で横断する場合の移動の形状は図5のように上方に弧を描く形となり、船で横断する場合には水平な形になるから、前者には「こえる」が用いられ、後者には「わたる」が用いられるのだと考えられる。

ただし、この「こえる」の移動の形状についての特徴は、経由点が障害物としてとらえられる場合に限られるようで、次のように経由点が特に障害物としてはとらえられない点や線である場合には考えられない。

- (102) ころがしたビー玉が しきりの線をこえる。
- (103) ランナーが 最後のポイントを こえる。

## 6. まとめ

以上の分析を次にまとめる。(指定する必要のない特徴項目については横線を引き、傾向的特徴と思われるものには括弧を付けた)。

		わたる	こえる
移動主体		自力で動くもの	自力、または外力を加えられて動くもの
表示する移動主体		出発点-経由点-到着点	経由点
経由点	幅 障害性	幅の想定されるもの	_____
		障害としてとらえられるもの	<幅の想定される場合> 障害としてとらえられるもの
		_____	<幅の想定されない場合> _____
	抵抗	_____	<水平な障害物の場合> 比較的大きな抵抗を伴うもの
_____		<水平な障害物でない場合> _____	
形状		両端が同一水平面上にあり、それが見通せる。	_____
移動の形状		_____	<経由点が障害物としてとらえられる場合> 経由点の上方に弧を描く形 <経由点が障害物としてとらえられない場合> _____

なお、経路の移動についてみられた両語の対照的相違は、4.で述べたように経由点についての相違から余剰的に導き出されることであるので、とりたてて指定する必要はないと考えられる。

〈注1〉 「新明解国語辞典第三版」では、「わたる」「こえる」について、具体的な移動の項目の他にそれぞれ次の意味用法の項目をあげている。

「わたる」(1)世間の人とつきあって暮らして行く。

(2)何かが相手の手から直接にその人の手に収まる。

(3)双方譲らずに何かをしあう。

(4)すみずみにまで達する。行き渡る。

「こえる」(1)ある基準より上になる。

(2)踏むべき途中の段階を省略して、先の所まで進む。

(3)ある範囲(限界)の外に出る。

なお、「こえる」は、具体的移動をあらわすものが「越える」、上に示した3つの項目はいずれも「超える」であらわされている。

〈注2〉 「ていく」「てくる」を「こえる」に付ければ(6)(8)も次のように可能な文となる。

(04) 日本から 海を こえてくる。

(06) 向う岸へ 川を こえていく。

しかし、これは「くる」「いく」が出发点、到着点を含意しているためであると考えられる。

〈注3〉 次の文が不適格文であることは、これを裏づけている。

(06) \*チャンピオンベルトが 太平洋を わたっている。

言語経歴：1958年9月 山口県長門市生 0歳～18歳 長門市 18歳～22歳  
山口市 22歳～24歳 神奈川県横浜市 24歳～ 東京都稲城市

## 参 考 文 献 一 覧

ここに掲げる参考文献は、本書の意味論関係の論文において各自が参照・引用したものを一括して、文献の著者の五十音順に並べたものである。著書・論文の内容により、ほとんどの者が参照しているものもあれば、ただ一人だけが参照しているものもある。このようにまとめたのはあくまでも便宜的手段であって、御理解、御寛恕願いたい。

- 池上嘉彦1975 「意味論」大修館書店  
 ——1981 「「する」と「なる」の言語学」大修館書店
- 大野晋・浜西正人1981 「角川類語新辞典」角川書店
- 奥津敬一郎1967 a 「対称関係構造とその転形」『日本語研究』I.C.U.  
 ——1967 b 「自動化・他動化および両極化転形——自・他動詞の対応——」『国語学』70  
 ——1975 「形式副詞論序説——「タメ」を中心として——」『人文学報』104 東京都立大学
- 影山太郎1980 「日英比較語彙の構造」松柏社
- 金田一春彦1950 「国語動詞の一分類」(金田一編1976『日本語動詞のアスペクト』麦書房に所収)
- 金田一春彦・池田弥三郎編1978 「学研国語大辞典」学習研究社
- 国広哲弥1967 「構造的意味論—日英語対照研究—」三省堂  
 ——1970 「意味の諸相」三省堂  
 ——1982 「意味論の方法」大修館書店  
 ——編1982 「ことばの意味3」平凡社
- 国立国語研究所1964 「分類語彙表」秀英出版  
 ——1972 「動詞の意味・用法の記述的研究」秀英出版
- 柴田武編1976 「ことばの意味1」平凡社  
 ——編1979 「ことばの意味2」平凡社
- 尚学図書編1982 「国語大辞典」小学館  
 ——編1983 「故事俗信ことわざ大辞典」小学館
- 新村出編1976 「広辞苑 第二版補訂版」岩波書店
- 高橋顕志1977 「四国諸方言における支持動詞カクについて——語彙による比較方言学の試み——」『都大論究』第14号 東京都立大学
- 寺村秀夫1982 「日本語のシンタクスと意味I」くろしお出版
- 徳川宗賢・宮島達夫1972 「類義語辞典」東京堂
- 中本ゼミ編1978 「日本語研究」第1号 東京都立大学国語学研究室
- 中本正智1981 「日本語の原景——日本列島の方言学」金鶏社  
 —— 「動詞語彙の意味記述」『人文学報』
- 西尾実他編1979 「岩波国語辞典 第三版」岩波書店
- 日本語研究会編1979 「日本語研究」第2号 東京都立大学国語学研究室  
 ——編1980 「日本語研究」第3号 東京都立大学国語学研究室  
 ——編1981 「日本語研究」第4号 東京都立大学国語学研究室  
 ——編1982 「日本語研究」第5号 東京都立大学国語学研究室
- 日本大辞典刊行会編1972—76 「日本国語大辞典」小学館
- 野林正路1980 「意味論の方法叙説」『言語生活』347  
 ——1982—83 「語よりも語の重なりが意味を区別する——疎外の意味論から人間主体復権の意味論へ——(一)(二)(三)」『日本語学』1—3
- 服部四郎1960 「言語学の方法」岩波書店  
 ——1968 「英語基礎語彙の研究」三省堂
- 半沢洋子1977 「場所の移動を表わす動詞の意味分析」『国語学研究』17 東北大学
- 文化庁1975 「外国人のための基本語用例辞典 第二版」大蔵省印刷局
- 本堂寛1976 「語の意味差と地理的分布——「かつぐ」をめぐる——」『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜楓社
- 森田良行1977 「基礎日本語1」角川書店  
 ——1980 「基礎日本語2」角川書店
- 山田忠雄他編1981 「新明解国語辞典 第三版」三省堂